

# 固有名詞の伝達の価値

岡 戸 伴 助

## 一、固有名詞による伝達の種相

ある一つの言語表現は、必ずしも常に同一の伝達をするものではない。このことは、さきに時枝談記博士によって明らかにされたが註一、ここには、言語伝達の一つの場合である固有名詞の伝達の様相についてしらべてみたい。

固有名詞は、ある特定の個物の表現であるところから、その伝達は常に必ず同一であるかのように考えられ易いが、この場合もその伝達の様相は他の言語一般の例と変るところがない。ただ、固有名詞は、ある特定の個物の表示であるという点において、その伝達の仕方的特色があるのみである。

時枝博士は、「甲によって表現される思想と、乙によって理解される思想とが、全然齊しくなることがあり得ない。」註二といっているが、固有名詞の場合は、ある意味においては、両者が一致する場合があり得るのである。

それは、素材たる特定の個物が談話の現場にある場合である。ただし、現場といっても、電話のような場合は例外で、ここにいるのは、その素材が話手聞手の眼前にある場合である。たとえば、甲乙二人が、「太郎」という人物を前にして当人物について

話をしている場合、話手甲の伝達した「太郎」は、乙の受容した「太郎」とは同一人物であるから、甲乙両者の認識に普遍性を認める限り、甲の伝達内容と乙の受容内容とは同一と考えてよいかと思う。

このように、固有名詞の伝達の場合は、それによって表示される個物が、話手聞手の眼前にある場合に限り、伝達は右のような条件つきで完全に行われるということがいえるであろう。けれども、固有名詞の表示する個物が談話の現場にない場合は、伝達の様相は一変する。そして、この場合、伝達の様相は、次の二様に大別される。

その一つの場合は、話手の伝達する個物を聞手がかつて経験したことのある場合である。

他の場合は、聞手がそれをいまだかつて経験したことのない場合である。

前者の場合は、聞手は当該人物「太郎」の映像をまざまざと心に描くことが出来、話手の伝達しようとした意図に近い「太郎」を受容することが出来るであろう。

ところが、後者の場合、すなわち、聞手がまだ「太郎」に逢ったことがない場合はどうであろうか。この場合は、聞手は「太郎」

の映像を描くべくもない。したがって、話手は伝達した積りでも聞手はこれを受容することは出来ないのである。もっとも、人はしばしば次のような錯覚を起していることがある。すなわち、「太郎」という名をきいて、ある特殊な人物像を描き、それを本物の太郎と思ひこんでいるような場合である。例えば、兼好法師が、

「名を聞くより、やがて面影は推し量らるゝ心地するを、見る時は、又かねて思ひつるまゝの顔したる人こそなければ。」(徒然草七一段)

といった嘆きは、おそらく誰しもが経験しているに相違ない。このような場合、人々は、「太郎」とか、「花子」とかいう名前からの連想により、ある特殊な人物像を描くであろうが、それは単なる仮像たるにとどまって、当の本人とは無関係である。

いうまでもなく、右のような場合は、固有名詞による個物の伝達は行われたいわなければならぬ。したがって、固有名詞として、その伝達効果は零である。

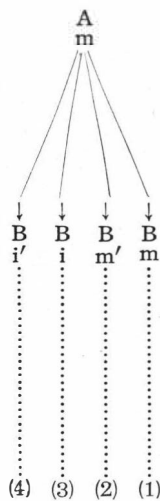
以上述べたところを要約すると、固有名詞の伝達効果は、次の三様に大別されるであらう。

- (一) 聞手が固有名詞の表示する個物を現在経験している場合。この場合は、ある意味において固有名詞は完全に個物を伝達することが出来る。が、後述するように、検討すると、種々の問題がある。
- (二) 聞手が固有名詞の表示する個物がかつて経験したことのある場合。この場合は、右の(一)に近いといえるが、それ以上に問題がある。
- (三) 聞手がその個物を経験していない場合。この場合は、固有名詞

はそれによって表示される個物を伝達することが出来ない。固有名詞は、その機能を果すことが出来ないのである。この場合、その伝達効果は普通名詞とほぼ同様である。

ただし、右のような場合は、写真とか、絵画とか、模型とか言語的説明などの媒介によって、一応、伝達を補助することが出来る。普通には、この方法が用いられているが、この媒介的方法によっても、右の(一)あるいは(二)のような伝達効果をもたらすことは出来ない。この媒介的方法は、固有名詞の純粹の機能ということとは出来ないが、以下、便宜上これを含めて論ずることとする。

いま、ここに伝達者をAとし、受容者をBとし、固有名詞によって表示される特定の個物をmとすれば、右の伝達価値は次のように図式化することが出来るであらう。



右図式の(1)は、前述(一)の場合であって、聞手が話手と同一の素材を体験している場合である。

(2)は、(一)の場合であって、聞手が素材mをかかつて経験したことのある場合である。m'はかつて経験した素材であって、mに変化する前の個物である。(後述)

(3)は(二)の場合であって、聞手がmを経験していない場合である。iは聞手が想像によって任意に描いた仮像である。

(4)は、(三)における m が媒介によって説明された場合である。i は、lm に対する説明によって、聞手が描いた像である。

右の図式によって明らかのように、素材たる個物は、一定の固有名詞によって伝達されるが、それは聞手に対して、一様に伝達されるものではなく、その受容の様相は多様である。次に、そのおのおの場合について検討してみたい。

註一 時枝誠記 国語学原論続篇第一章「言語による思想の伝達」

註二 同書 三六頁

## 二、固有名詞の伝達第一種

まず、第一種の

A m ———→ B m

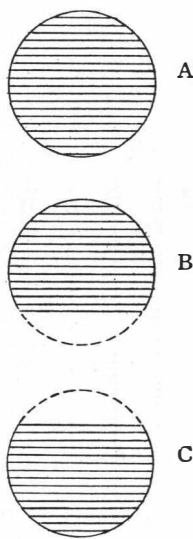
について見るに、この場合は、前述のように、一応、固有名詞が完全に個物を伝達することが出来ると言い得る。が、次のような諸点に問題がある。

まず、固有名詞によって表示される個物が、人物とか、器物(たとえば、「唐革」(鎧の名)「青山」(琵琶の名)、「小枝」(笛の名))のように容易に直観される場合は、伝達は比較的に完全である。けれども、地名とか、事件名などの固有名詞になると問題がある。それは、地名という固有名詞によって表示される事象、たとえば「東京」とか、「アメリカ」とか、「利根川」などという場合、話手の認識と聞手の認識との間には相違がある。「利根川」という固有名詞についてみた場合、上流地方の人々は、「利根川」(固有名詞)に対して、狭い急流を表象するであろうが、下流地

方の人々は漫々たる大河を表象するであろう。

同様に、「東京」といえば、論理的には、その行政圏内に含まれている事象を規定しているわけであるが、実際には、話手の伝達内容と、聞手の受容内容との間には、常に、いろいろの色合をもって相違が見られるのである。

これを図示すれば、



A、具体的事実としての東京。固有名詞「東京」によって本来伝達さるべきもの。

B、話手甲の伝達内容たる東京。実線の部がそれ。

C、実線の部分が聞手の受容内容たる東京。

地球の表面は、地名という固有名詞をもって覆われており、同一の地域は常に同一の固有名詞をもって呼ばれているが、これを実際の言語伝達について見ると、右のようにいろいろな色合をもって伝達され、受けとられているのであって、同一の固有名詞は常に必ずしも同一の内容を伝達し受容しているのではないのである。

「東京」というとき、これを受取る人々の意識内容が違うのは、東京という地理的事象に対する各人の体験内容が違うからであ

る。法律や登記の対象として取扱われる東京は、すべての体験内容を捨象した東京であるが、日常生活や文学などに取扱われる東京は人々の体験内に生きている東京である。両者は明らかに異っていると考えなければならない。

右の地名の固有名詞と同様のことが、事件を表示する固有名詞についてもいえる。いな、むしろ、事件名固有名詞は、地名よりもっと伝達が容易でないと考えられる。それは、地名によって表示される地理的空間は静的であるから繰り返して体験され得るに對し、事件は、動的であり、一回の経験しか出来ず、しかも、直接経験の領域は、一個人としては極めて限られたものであるからである。ある一つの事件を一個人が全体的に体験するということは事実不可能の場合が多い。

かくて、「明治維新」とか、「大東亜戦争」というような固有名詞は、一応の事實的、論理的規定をもっているが、實際の言語活動にあっては、それぞれの伝達受容の内容に著しい相違を来すわけである。

以上のように、現在直接経験している事柄でも、全体的直観の出来難い事象にあっては、完全な伝達は出来ないといわなければならない。

さきに、人名の固有名詞は完全に対当人物を伝達し得るといったが、仔細に検討すると、ここにも問題があるのである。というのは、人物は、一応全体的に直観が出来るのであるが、それは多くの人に知られない潜在的な諸性質を湛えており、又、複雑な過去の経歴を内蔵するものであって、厳密にいうと、短時間の認識

をもってしてはよくその全貌を捉えられるものではない。したがって、赤ん坊の頃から青年時代までのことをよく知っている父親の伝達内容と、初対面の相手の受容内容とは著しく相違するものである。

以上のように、一見、伝達が行われているように見えながら完全でないのは、言語主体が固有名詞によって表示される特定の事物を十分把握していないことに起因しているのであって、現実の言語活動にあっては、このような話手聞手間の不一致が極めて多いのである。

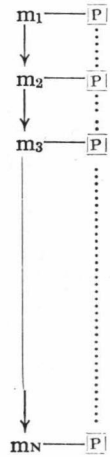
### 三、固有名詞の伝達第二種

次に、(2)の

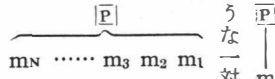
A m  $\longrightarrow$  B, m'

について考えて見るに、これは、聞手が、固有名詞によって表示される事物を以前に経験したことのある場合であるが、この場合は、聞手Bにおいて、心理的に印象がうすれて、その個体のもつ特性の一部が失われているという主體的な事情があるが、更に重大なことは、固有名詞によって表示される事物が時と共に変化してゆくことである。たとえば、人物「太郎」にしても、赤ん坊時代の太郎と壮年時代の太郎とはよほど相違しており、ある場合には、幼年時代の面影を全くとめていない場合さえ珍らしくない。「東京」という固有名詞によって表示されている事象についても、維新時代の東京と、大震災時代のそれと、現在とではそれぞれ著しく相貌を異にしており、維新時代の東京人に今日の東京

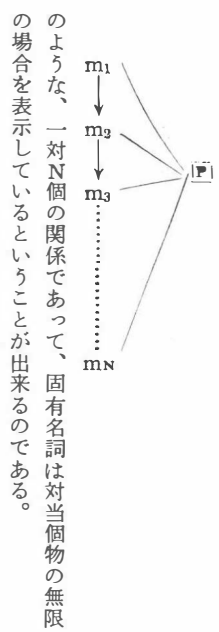
を見せたならば、おそらく浦島と同様のなげきをもつに相違ない。  
 このように、固有名詞は、ある特定の個物の表示には相違ないが、それは、その個物のある瞬間における特殊相を表示するものではなく、その個物の誕生から成長を経て消滅に至るまでの一般相、つまり個体概念を表わしているのであって、ここにおいて、固有名詞は、多くの外延をもつ一般概念を表示する普通名詞的な性格を帯びているのである。右の固有名詞と対当個物との関係を図示すれば、



すなわち、対当個物  $m$  は、 $m_1, m_2, m_3 \rightarrow MN$  と無限に変化してゆくに対し、一旦命名された固有名詞  $P$  は永久に変らないのである。ここにおいて、固有名詞と対当個物との関係は、



あるいは、



のような、一対  $N$  個の関係であって、固有名詞は対当個物の無限の場合を表示しているということができるのである。

このような場合、話手の伝達する  $m$  に対して聞き手の受容する  $m'$  が近ければ近いほどその伝達は話手の意図に近くなって来るわけである。 $m'$  の状態が現在の  $m$  の状態に著しく遠ざかると、次の (3) の場合に近づいてくる。たとえば、話手が壮年の太郎について話しているとき、聞き手は赤ん坊時代の太郎しか知らなかったというような場合である。

このように、(2) の場合は、伝達の様相は、結局、 $N$  個の場合が考えられるのであって、厳密に言えば、その都度毎に相違していきるといわなければならない。

ここに、固有名詞伝達の本来の機能について考えて見るに、固有名詞は対当個物の一般相を表示するものであるから、聞き手にも、その一般相すなわち個体概念の喚起を媒介すれば足りるといえるであろう。赤ん坊の太郎も「太郎」であり、壮年の太郎も「太郎」であるから、聞き手に「太郎」を喚起させさえすれば、それで固有名詞「太郎」の伝達機能は完了したともいえるであろう。

固有名詞のもつ伝達機能の性格が右のようであるから、その伝達が多様性を帯びてくるのであり、その伝達を当該個物の特殊相に近づけるためには、「少年時代」の太郎とか、「あの時の」花

子というような表現上の工夫が必要となってくるのである。

人はしばしば、ある個物の過去について語る場合があるが、そのような場合、話手聞手間の不一致は決して珍らしいことではない。

#### 四、固有名詞の伝達第三種

次に(3)の

A m → B i

は、固有名詞が伝達の機能を果さない場合である。聞手Bは、話手Aの伝達しようとするmを経験していないのであるから、さきに引例した兼好法師のように、「名を聞くよりやがて面影を推し量」って、あるイメージを描くであろうが、それはいうまでもなく当の本物とは無関係であるから、伝達は行われないのである。

右のような場合は、その名前のもつ概念的な意味からの連想によって、その人を髣髴することが多い。けれども、その名前の意味が不明であったり、耳遠いものであったりする場合、たとえば

真 甘

沢波美

註一

のようなものであったら、われわれは概念も仮像も描きようがないのである。あるいは、これが固有名詞であることすら不明である場合があるであろう。辛うじて、

牌伊蘇女年卅三

奴真 廿年廿四

奴沢波美年五〇註二

と記してあつてはじめて固有名詞ということを知るであろう。(もっとも、このように身分や年齢の説明あるものは、次の伝達第四種に属すべきものであろう。)が、われわれは、このような固有名詞を通じて、それらがどのような人物であるか知る由もないのである。

一般に、言語は概念の表示伝達であると考えられているが、<sup>註三</sup>概念以前に素材を考量することが重要である。素材たる事物の体験を基底にもたない言語伝達は空洞となるのであつて、その伝達効果は稀薄である。その一極を示すのが固有名詞の場合である。

われわれの言語活動に多く遭遇するのは、既述の伝達第二種の場合であろう。この場合、聞手の受容するものは、実は、個体概念である。個体概念の媒介によつて、聞手は対当個物のイメージを描くのである。が、この伝達第三種(3)の場合、この固有名詞の中核をなす個体概念の成立するすべがないのである。カントのいう「直観のない概念の空虚」をここに見るのである。

このように固有名詞による伝達にあつては、受容者が、対当個物の経験をもたない限り、その伝達は不可能である。ソシュールは、概念をもつて言語活動の起点、終着点としたが註四、固有名詞にあつては、それが不当であることは右の説明によつて明らかであろう。

固有名詞に限らず、言語活動にあつては、素材を考慮することは極めて重要であり、殊に、文学や日常生活における言語において然りである。

とも角、われわれの言語活動にあっては、右のような空疎な言語伝達が極めて多いのである。大部分の古人の名前はこれに属し、未知の人名、地名なども皆これに該当するのである。

註一、註二 群書類従巻第五百十二 東大寺奴婢籍帳

註三、註四 F. de Saussure, "Cours de Linguistique générale".

1955. P.128. 小林英夫訳「言語学概論」二二頁—二二頁

## 五、固有名詞の伝達第四種

右の伝達第三種のように、固有名詞が個物を伝達することが出来ない場合、多くは、写真とか、絵画とか、説明のような媒介的方法によって伝達の欠陥が補われるのが普通である。歴史上の人物とか、外国の土地や人物などをわれわれが知るのはいくつかの方法によるのである。これは、固有名詞の純粹の伝達機能ということとは出来ず、むしろ、その媒介の方に機能の契機があるとも考えられるが、固有名詞による伝達の場合にこのようなケースが極めて多いのでここに論ずることとする。この、

A m ———→ B i'

における、i'は、話手Aの、素材mについての説明によって、聞手Bが描いたイメージである。われわれは、日常、このような説明によって納得し、これをもって真実と思ひこんでいる場合が多い。たとえば、秀吉の肖像を見、その歴史的事跡をきいて、そのイメージを描き、これを本物の秀吉だと思ひこんでいるような場合である。歴史的人物や、われわれの直接経験の及ばない外国の土地や人物の理解は、結局、このような方法によらないわけには

いかないが、この場合は、どのような巧妙な方法を用いても、さきの伝達第一種や、第二種のように対象の具体相を認識させることは出来ないのである。

その理由はすでに先人が明らかにし註一、多言を要しないであろう。要言すれば、以上の方法は結局、伝達しようとする個物の外にあって、その個物に対して多くの視点をとり、これを符号に翻訳し、これを結合することによって成立している。

たとえば、人物に例をとれば、その属性である、年齢、性別、身長、容貌、性格等に視点をとり、それぞれ言語に表現し、それらを結合することによってそのものを認識させようとするものである。そのような属性の結合は、結局、点の集合であって、その特徴点を無数にあげてみても、直観のように、対象を全体的に、各部分を不可分の状態で印象させることは出来ないのである。かつ、言語そのものは、概念的表現であり、既知の一般的なものであって、そのものをしてそのものたらしめる個を表現することは出来ないのである。

写真や絵画等の媒介も原理は右と同様である。

右のように、この第四種の方法は、個物を完全に伝達することは出来ないけれども、実践的意義を多分にもっているのである。直接経験に限界のあるわれわれは、その限界外の人物や事件や地理的事象等を認識するには、この方法による外はないのであって、これによってわれわれは知的欲求をみたし、将来活動への拠点を得るのである。

註一 ベルグソン 哲学入門 河野与一訳 等。

## 六、結 論

以上によって、同一の固有名詞は、必ずしも同一の伝達の効果をもたらすものではなく、聞手の状況によってその効果が極めて多様であることを明らかにした。右のような結果はどうして生ずるかというに、聞手が素材たる特定の個物を体験しているか否かということに因由する。

そして、聞手が素材たる特定の個物を直接体験している時にその伝達は完全である。

右の伝達の様相をわれわれの言語生活について見るに、家庭生活にあつては右の伝達第一種、および第二種に属するものが多く、学校教育や、マス・コミの伝達などにあつては、第三種および第四種が多い。

また、これを時代的にみると、近代以前の言語生活にあつては、第一種および第二種が多く、近代、ことに現代は第三種および第四種の場合が多い。これは何故かというに、近代以前の言語生活にあつては、人々の素材体験と言語体験とが一致する場合が多かつたが、近代社会になつてから、伝達範囲が拡大されるに至つたため、素材体験は言語体験に及ばないものになつたので、両者の間に不一致を来すこととなつたのである。

—— 関東短期大学教授 ——